18

hina no marebito のまれびと

中野の光輝く「太陽」

おせっかい協会会長　高橋恵（たかはしめぐみ）さん　(77)

中野の一般社団法人おせっかい協会で会長を務める高橋恵は東京芝浦電機（現・東芝）仁川工場の技師だった父と佐賀の病院長の子に産まれながら伝染病で一家離散し鹿児島で養女になった母の次女としてソウル近郊の仁川で産まれた。父が30歳で戦死、母は26歳で戦争未亡人となり、戦後鹿児島でパン工場を始めた。病院や学校相手に経営も順調だったが、超大型台風で甚大な被害を受け、家族4人で上京。母が始めた商事会社が不渡りとなり、債権者が来た。その日、近所で無理心中が。母親は3姉妹を前に「お父ちゃんのところへ行こう」とつぶやく。玄関の扉には「希望を失わないで。あなたには3つの太陽がある。今は雲間に隠れていてもいつか必ず光り輝く時が来る」という近所の人が書いた1枚の紙片が挟まれていて一家心中を思いとどまった。

ある時、3姉妹は近所の子から菓子をもらい食べた後、「駄菓子屋で万引きした」と聞かされた。帰宅すると母親が3人をビンタ。次いで「お父ちゃんの分」と言って左手でぶち、「天が見ている。大地が見ている。自分が一番知っている。よく覚えていなさい」と言って泣いた。そんな母の躾（しつけ）が恵を育てた。

さらに生活が困窮すると、恵は埼玉の母の知人の家で中学3年間を過ごす。冬の朝晩の雑巾がけは手に凍みる。夜、勉強の灯りに「まぶしくて寝られない」と怒鳴られる。お腹いっぱい食べようとすると「いやしい子だ」と白い目を向けられた。飼い犬に餌と別に1日2本の牛乳を飲ませるのも日課。自分も少し飲もうかと思った時、母親の声「天知る地知る我知る」が聞こえたのでやめた。

中学卒業後、親元へ戻り、本屋でアルバイトをしながら高校へ通い、非行少年の面倒を見るボランティア活動にも参加。バイト代を前借りし年子の姉に「これで修学旅行に行って」と渡すと、「私が働いてあなたを必ず大学へ行かせてあげる」と言われる。短大卒業後は広告代理店で営業に邁進。2年後に職場結婚し退社。そばで母親の苦労を見てきたので種々の販売で実績を挙げるも、「女は家事」を譲らない夫と相容れず40歳で離婚。42歳時に中野でサニーサイドアップを創業、電話番号で調べて片っ端から訪問。「過去の逆境が力になった」と言い数々の伝説を生む。同社は後継の長女がアスリートのマネジメントで実績を伸ばし昨年12月に東証1部上場。子育て、孫育てを終え、おせっかいの講演や執筆、ゴミ拾い等に励む恵の周りにはいつもおせっかい仲間がいる。まるで太陽を取り囲む地球など9つの惑星のようだ。〈文中敬称略〉

文・写真　山ノ堀正道